クズネッツを迎えて

大　川　一　司

経済成長研究

1961年の暮から1962年の正月にかけて約1ヶ月クズネッツ Simon Kuznets 教授夫妻を日本に迎えた。アメリカに Social Science Researh Council というのがある。その Commitee on Economic Growth の委員長として，日本の経済成長の研究にアドバイスを与えてくれるようにという私どもの要請に答えてやってきたのである。この委員会は3年ほど前に日本の経済成長研究のために小委員会を設けた。カリフォルニア大学のロソフスキー Henry Rosovsky 君などがそのメンバーになり，すでに昨年から東京にきて研究活動を開始していた。私もこわれてそのメンバーになり共同研究に参加した。クズネッツは直接にはこの共同研究のアドバイザーとしてやってきたのである。

したがって滞在中のスケジュールはそのような主目的の線にそって作られ私ども小グループの私的討論を主体とした。クズネッツにはこれまで学会などで数回接触してはいるが，こんどのように集約的に私的討論をする機会をもったのは私としても初めてで，えがたい勉強をしたことを喜んでいる。この覚え書では，しかしこの私的討論の内容を主体としてではなくて別のもっと一般的なことに重点をおいて書く方が適切だとおもう。

せっかく1ヶ月も滞在されるのだからというので，都留・板垣・木村(元一)の本学3教授，およびロソフスキー教授それに京都大学の青山教授などの御配慮と御助力によって，可能な範囲で広く先生との接触をもつべく次のプログラムをたてて実行した。

1. Some Problems in the Quantitative Study of Economic Growth と題する彼のスピーチを中心に討論(於一橋如水会館，東京とその近辺の大学・官庁の人達参加)。

2. Economic Epochs and Economic Growth に関する一般学生への講演(一橋大学で)。

3. Capital Investment and Economic Growth についての大学院学生，研究スタフのセミナー(一橋大学で)。

4. Industrial Structure and Economic Growth と題するスピーチとその討論(関西の大学関係の人達参加，大阪大学で)。

5. 日本経済の分析に関する青山教授司会のセミナー(関西研究者参加，同志社大学で，報告は上野氏の長期モデルと，佐藤氏の阪大戦後経済のモデルの1部分)。

6. 労働経済の分析に関するセミナー(慶応大学で，西川氏報告)。

7. 国民所得の長期推計に関するセミナー2回(一橋大学で，篠原，梅村，江見，大川の4氏報告，経済研究所スタフを中心に)。

これらを通じて私のえた印象と感想を綴ろうとおもうのだが，もれなくすべてにわたってスピーチと討論の内容を紹介するという正統な手続の上に乗ってそれをやるわけにもいかない。総じていえば“経済成長研究”ということが何といっても主体となるのだが，私なりに大づかみに2つの問題にしぼって重点的にかいてみる。1つは「経済成長」ということに関する彼の基本的な考方ともっている問題，もう1つはそれを研究するための彼の方法論。

諸国民の経済成長

“The Economic Growth of Nations”. これが彼のもちつづけている問題である。Wealth を Economic Growth におきかえると問題の大きさがわかる。このどえらい大きな問題に関して彼のもっている考え方はどんなものか。それをもっとも包括的に，しかし序論的に述べたのが一橋大学での学生一般にたいする講義(No. 2，以下講義，セミナーは前述の番号で参照する)であった。彼の直接の関心はいうまでもなく Modern Economic Growth にあるわけで，これはわれわれが資本主義的発展としている時期にほぼ相当するのだが，この時期区分の問題への解答が彼の題名に表れた Epochs 論である。Epoch というのは“画期”ということで近代経済成長は Modern economic epoch として画される時期の現象としてとらえるというところから彼は出発する。何でそれを画するか。その画すものを epochal innovation というが，近代のそれは経済生産にたいする“科学の広汎な適用”によってそれ以前の時期と明確に画されるとみる。

このことを説明するために教授は“merchant capitalism”，さらには中世まで遡って革新の事実的説明を詳

しく与え，現代の特徴を浮彫にしようとした。その豊富な歴史的知識は印象的で，“歴史専攻”をもって任ずるロソフスキー君との間の討論(とくに科学的発見とその応用的発展についての事実的認識について)などには私はついて行けなかったし，また学生諸君も問題があまりに大きすぎてとりつきにくかったようにおもう。

それはともかくとして，この画期という問題設定の裏には経済成長一般についての理解の仕方の特徴づけがある筈である。この点について技術的変化と社会的(ないし制度的)変化および精神的変化(spiritual changes)の3つならびにその相互作用を彼は考えているようである。2つの例をあげて教授の理解の仕方の一端を示そう。技術的変化と制度的変化の相互作用を重視する視点から，近代の経済成長を工業化 Industrialization として特徴づける見解に彼は反対する。それは旧社会制度の変革を包み，農業等の他の産業の変化を伴う包括的変化(aggregative change)だからである。精神的変化とは人間の考え方，価値基準の変化をいうようだが，この認識は現代経済成長の測定の基礎に横わる評価の相対性の問題に通ずるのである(さらに No. 3 で，指数問題に関連して若干討論)。

こうした現代の経済成長の特徴づけ，位置づけはこれまでの彼の書物にも論文にも十分に展開されていないが，目下執筆中の“The Economic Growth of Nations”で初めて詳しく述べると彼は私の質問に答えていった。

ところで彼の Epoch 論をどう解したらいいか。それはそれ自身としての展開というよりも彼の計測論のフレームワークの形成であると私にはうけとれる。それだけに前述の“相互作用”云々にしてもそれが量的研究といかに結びつくかなど方法論的な点については疑問が残るようにおもう。

ところで本題の現代経済成長の研究についてその事実的特徴を教授は人口(ならびに労働力)の持続的増加，1人当り産出高の持続的増大およびそれに伴う広汎な経済構造の変化，この3つに求めている。このことは数回にわたって序論的にのべた(No. 1, No. 2, No. 4 等)ひとは人口増加そのものが，一般の見解と相違して独立に含まれている点に注目してよかろう。かかる事実的特徴を客観的，量的につかむことが第1の問題であることは彼の立場から当然だが，それについて彼は3つの視点から問題を設定する。第1は集計的 aggregative，第2は構造的 structural そして第3は国際的 international な問題である(No. 1 のスピーチはこの順序で行われた)。クズネッツがかねてから成長論を展開するにさいして単位としての国家の得失を論じていることは知る人もあろう。彼は国家単位の成長研究について国際的な主導者として精力的に今日まで活動してきたが，初期の集計的問題から次第に構造問題をも同時に重視するようになり，さらに最近では成長現象の国際的波及について関心を強めているとみられる。

いろいろな機会にこれらの業績の骨子が紹介されたが，驚くべきことにここでも計数的論議には1度も立ち入らなかった(ただし No. 7 の計測セミナーは例外)。教授は産業構造を論じたとき(No. 4)も，資本蓄積を解いた際も(No. 3)，つねに問題の処在を性質的に明確にすることに努めていたように私はおもう。問題の処在といま書いたが，それは2重の意味をもつ。第1にこれまでの研究でわかったことを整理し，第2になお不明の問題を提示することである。要するに諸国民の経済成長の真の総合的分析はまだその緒についたばかりである(No. 1 の結論)という考え方で経済学の現状をみているとうけとれた。スミスにしてもマルクスにしても，彼等の生存した時代までの経験的事実に依拠してそのドクトリン(セオリーといわない)をつくった。その後の厖大な経験的事実の整理の上に経済学は新しい開拓ができるし，しなければならぬ(No. 1 と No. 2)と教授自身が自分に問題を設定していることは確実である。

このような問題の設定の仕方を，いまの経済学一般の中で私なりに特徴づけてみれば(計測論を別にして)，それは“長期論”ということではないかとおもう。クズネッツはしばしば sustained (持続的)という表現を与える。そして Rostow などがこの表現を不正確に使うと批判しているが，それは短期変動を越えたという意味での長期現象の認識にもとづくものである。その正確な定義は近刊の彼の著 *“Capital Formation in the American Economy”* に詳しいが，この点で彼はたしかに特徴ある問題を設定している。集計的，構造的ないし国際的の何れにしても long term changes の規則性を発見することが課題とされているからである。教授は好んでジョークをいう人柄ではないが，ケインズの例の「in the long run 云々」を好んで逆用している。短期から区別された長期のビヘィビアが統計上のイルュージョンでなくて現実に存在する，という認識に強く立っているのである。(No. 1 でやや詳しく，No. 5 で討論にさいしいささか言及)。

クズネッツ型

前述の一般講演での紹介者，中山教授は彼を「統計家で云々」といった。私はちょっと驚いた。しかし考えてみれば，中山教授のこの紹介の言葉はむしろ経済学者一

般がクズネッツをみている見方を適切に表現したものかもしれない。私がそれを素直にうけとれなかったのはおそらく前節でのべたような彼の問題と考え方にとくに関心をもっていたためでもあろう。それにしても人によって見方はちがうものだと痛感した。

青山教授は大阪大学の集会(No. 4)での紹介スピーチで次のような意味のことをいわれた。「わが国での経済学の研究は最近とみに進歩したが，クズネッツのようなタイプの学者に親しく接しうることは，その一層の進歩のためにきわめて望ましい。わけてその堅実な学風の故に」と。アメリカでも欧州でも“クズネッツ・タイプ”の学者とか研究とかいうことをときどき耳にする。クズネッツ型というものがはたしてあるとすれば，それは何だろうか。私も青山教授のいわれたことにその場で賛意を表したのだが，さて日本の経済学界への好ましい効果を教授から期待しうるものが果して何であるか，と自問してみると答は容易ではない。“統計家”(？)としての彼の側面と，彼が自分に課している問題とそれへの接近の考え方との間には，人々の印象としての分裂があるのではないか，という点だけをここではとり上げよう。

何もクズネッツの場合にかぎらないが経済学上の仕事を理解するとき，問題の設定の仕方とそれへの接近方法とは区別して考える方がいいと私はつねづね思っている。そこでこの節では接近方法の方に重点をおいて「彼を迎えた報告」をかく。これがいわゆるクズネッツ型の方法的内容をいくらか明かにしていれば幸である。

第1に何といっても経験的事実の尊重ということ，経験主義といってもいいがこれが教授の信条であることはまちがいない。そのようにいうとき誤解をさけるために次のことをすぐつけ加えていっておかねばならぬ。クズネッツは国民所得とそのコンポーネンツの計測の大家だから，何でも量的に還元された経験的事実だけを重んずるとみられがちだが決してそうではない。私は私的討論で日本の問題について技術進歩の型と早さについて話しをしたが，彼の徹底した事実追求にはきわめて不十分にしか解答できなかった。前節でもふれたように現代の経済成長についての古典派いらいのドクトリンが，その後生じた経験的事実(わけて技術的発展)と無縁であるという点に教授は強い不満をもっているのである。

技術変革の話を例にだしたついでに私の質問にたいする彼の答をのべておこう。問。「生産函数，相対的分前などによる最近の研究をどうおもうか？」答。「最も大切なことは現実におきている技術変革の事実を組織的に整理することである。」不幸にして整理するための方法を詳にすることはできなかった。

量的な推計の必要性についてはいまさらここで多言を要しないほど彼は強い信条をもっている。一橋の経済研究所での推計セミナーでは教授のこの側面がもっとも強くでた。篠原氏が個人消費，梅村氏が農業の資本と産出高，江見氏が貯蓄，大川が個別推計の総合化についてそれぞれ報告した。教授のリードによる討論内容は余りに専門的だから紹介を省略するが，私の注文に答えて教授が最後に行ってくれた総合的リマークスは印象的だった。

「推計という作業はほとんどエンドレスにみえ経験者のみが知りうる苦労を伴う。しかしこれなくしてどうして経済学が進歩しえようか，自分のことをいうのはどうかとおもうが，私の所得，貯蓄に関する長期推計がなかったとしたら，人々はいかにしてアメリカの貯蓄，消費函数を長期について論じることができたであろうか」と彼は敢ていった。さらにこうもいった「人間のイマネジネーションには限りがある。だから理論はどうしても経験的事実によるテストを必要とする。それをくり返すことによって学問はすすむ」と。私にはこの「人間の imagination には限りがある」という言葉がとくに印象的だった。

第2に Comprehensive な方法の重要性ということである。教授はこのことをとくにとり上げて強調して，まとめた話をしたわけではないけれども彼との接触はこの点を強く感じさせた。内容は平たくいえば，研究の方法と態度の一貫性，総合性ということである。例をあげて説明しよう。

産業構造の話(No. 4)のときか方法論の話(No. 1)のときか或は両方か記憶がたしかでないが，1つや2つの部門によって経済成長を論ずることは危険だと彼は指摘した。インダストリアリゼイション論とかロストウ的な leading sector 論にも関係しようが，とにかく国民経済計算の体系によって全体としてコンシステントに成長現象を記録しないかぎり，何れにしろ分析は部分的で不十分だというのである。歴史家のやることはこの点でとくに問題がある。多くはそれは Symbolic だと彼は批判した(No. 1, No. 2)。ロソフスキー君はこれに反論していたけれども，私としては Comprehensive にということは科学的方法の属性だとおもってきいていた。

個別的問題でも alternativies すべて考えるということを指摘していたようにおもう(No. 6 でも，私どもの私的討論でも)。1例をあげよう。ロソフスキー君と2人で討論のための作業報告をそのつど提出したのだが，たとえば日本経済発展の“Initial Stage”(明治初期から

日露戦争まで)に関する報告で在来部門と近代部門の相互関係を重視したのにたいし，その関係を生産，投資・貯蓄，貿易，消費，労働力等の各面を通じ総合的にもれなくセットする要請を教授は強く出した。私は問題設定としては同意したが，いまだにデータ・ネックで弱っている。彼は同情して曰く「自分は批判をしにきたのだから，あしからず」と。だが彼は私どものやることがとかく本格的でないとの印象をもったにちがいない。

考えてみれば日本経済の研究についてそれが部分的に偏し，かつしばしばsymbolicな結論をえただけで満足している場合はたしかに少くない。産業構造の長期的研究などでも，先日Fabricantがきて話したときにもやはり感じたことだが，徹底的に洗った仕事というものはない。景気変動についてもそうである。青山グループ，とくに馬場氏等のすぐれた業績はあるが，これが長期的変化の研究と結合するように継続的に整備されたreference chronologyを提供するに至っていない(京都の宿での雑談で)。この話はいまの主題からいささかそれたきらいがあるが，日本の実証的研究が全体としてComprehensiveな進歩をしていないという反省としては，言及しても場ちがいでもなかろう。

第3には“1国主義”とでもいうべき点をのべてみたい。最近スタンフォード等の諸業績が国際的なクロス・セクション・データを駆使して多くの興味ある研究結果を示していることは読者も知っておられよう。クズネッツ自身も“*Economic Development and Cultural Change*”誌の特別号でこの種のデータをも大いに利用してつぎつぎに研究を発表している。それはQuantitative Aspects of the Economic Growth of Nationsと題されているが，1週間ほどまえその第7号The Structure of Consumptionが手許にとどいた。

そこで長期変動の研究にとって国際的なクロス・セクション・データを利用することの妥当性いかんという問題をわれわれはもっているわけである。クズネッツはどういう見解をもっているのか実はハッキリしなかったが，こんどの討論(わけてNo. 1)で彼がきわめて強くこの国際データ利用に消極的であることがわかった。彼は断乎としていう。「われわれは1つの国について徹底的に信頼しうる歴史的な記録を整備することに当面全力をあげねばならない」と。クズネッツは1つの国の長期的なタイム・シリーズこそが彼の問題(前節参照)への接近のベストなデータを提供する，国際的クロス・セクションはたかだかごく大まかに方向を決定し，推測を助けるデータにすぎないという。私自身も戦前における国際的クロス・セクション・データ利用の犯人(?)だが，学習院大の渡部氏はチェネリー氏との協同研究等の関係もあり，クズネッツのこの見解にたいして鋭く反論した(No. 1)。

私はこの論争は研究者のもっている問題設定の性質と無関係には有効に解決できないような気がしている。何しろクズネッツは別の機会にHistorical Consistencyということさえいったとおもうが，それは経済的変化と社会的変化の相互作用をも含む筈のものである。こういう概念は前節にごく簡単にのべた彼の基本的な考え方にもとづくものと解される。そうであれば1国のcomprehensiveな研究こそ第一義的となるのは当然であろう。私自身は従来からこの点について迷ってきていたのだが，いまは大分“1国主義”に傾いたようだ。人よんで“クズネッツ・エフェクト”という。

第4にそして最後に長期の実証分析について一言してこの覚え書を終ろうとおもう。すでに前節でふれたように“長期”思考は人間ビヘィビアの長期性側面の存在という現実に依拠している。私どもは彼のTrends論や例のLong-swings論は知識として心得ている。しかしこんどの討論(わけてNo. 1，それから少しNo. 5)で彼が方法としての“長期”について強い関心をもつことを知った(ついでながら近刊“Capital Formation etc”．にもその若干の展開がある)。そこで私は率直にいった。「そういう面について私どもはこれまであまり討論をしていない」と。彼はしかし答えていった。「日本だけではない。アメリカでも十分に討議されていない」と。教授はこれを新しい問題とおもっているようにみえる。概念的問題としても統計的操作の面からも，この点はもっと突っ込んでみるに値すると私は感じた。長期モデルというのはやはり長期行動という短期とは理論的に区別された面の理解にたたなければできないのではないか。ことのついでだからいうが，Long-swingsの如きも短期の変動がほんとうにわかってそれを組織的に抜ききってはじめて本格的なものとなろう。クズネッツは私どもの研究の順序について忠言していわく「クズネッツ波動などはあとまわしにした方がいい」と。